

南越前町瀬戸集落の星空観光に向けた取組み*

下川 勇^{*1}

Report about Starry Sky Tourism in Seto Village in the Minamiechizen

Isamu SHIMOKAWA^{*1}

^{*1} Faculty of Engineering, Department of Architecture and Civil Engineering

This report settles a method to push forward starlit sky sightseeing. The target area is "village Seto" of Minami-Echizen-cho, Nanjo-gun in the central part of Fukui, and this village is a small area among the forest, and a population decline advances. We plan the tourism which assumed these tourist attractions in "blue snow" being characteristic when "a star looks beautiful" in this village.

This report shows various conditions for the establishment of the starlit sky sightseeing and introduces an action from 2017 through 2019.

Key Words : Starry Sky Tourism, Seto Village in the Minamiechizen, Eco-Tourism, Revival of Regional Cuisine

1. はじめに

文部科学省私立大学研究ブランディング事業：『宇宙』事業推進のために地域と協働する“ふくい PHOENIX プロジェクト”に所属する観光文化研究軸として、南越前町宅良地区瀬戸集落の星空観光に向けた 2017 年度から 2019 年度に実施した研究の結果を報告する。

観光文化研究軸の研究は、主として、地域特性に対応した星空観光の仕組みを開発すること、地域に星空の価値を啓発すること、星空観光の実践によって観光交流人口を拡大することを目的とした観光研究に位置づけられるが、星空観光にとって課題となる雨天時への対応、深夜の時間帯への対応など、一般的な観光形式とは異なる特殊な観光形式となることから、むしろ都市・地域研究として、地域の空間特性や地域コミュニティへの理解から研究をスタートすることになる。しかしながら、同研究軸における六呂師高原や勝山小原集落の星空観光研究とは異なり、瀬戸集落には観光資源や誘客施設がなく、観光客を迎え入れる仕組みもないことから、第一に、観光資源の発掘調査とまちづくりの組織づくりによって集落観光の仕組みを確立すること、第二に、その仕組みに星空観光のシステムを導入すること、このような二段階の取組みとする必要があった。そのため、研究期間内に星空観光を市場に展開するまでには至っておらず、今後も、本研究は継続することとなる。

そもそも、瀬戸集落を対象地に選定した理由は、六呂師高原や小原集落とは異なる条件、すなわち、既成の観光形式が存在していないことを第一の条件として、人工照明が少ない場所、駅や IC が起点となる場所という地理的条件による。同研究軸の研究目的に抛りながら、他地域とは異なる条件を設定することで、星空観光形式の研究に別の観点を与えることを目論んだ。この異なる観点は、星空観光の特殊性、つまり、対象地域への空間的理解と人的理解を深める必要性を際立たせ、延いては、星空観光の持続性に向けた具体的取組みへの方向性を定める重要な情報となる。実際、瀬戸集落の研究によって、六呂師高原の誘客施設の修正点と小原集落の空間利用の修正点が指摘されるような、研究に関する相互連携の仕組みが見出されるにいった。

* 原稿受付 2020 年 5 月 29 日

^{*1} 工学部 建築土木工学科

本稿は、PHOENIX プロジェクトの最終年度として、昨年度の報告（福井工業大学紀要）に 2019 年度の実施内容を加えて再整理し、瀬戸集落での星空観光に向けた取組みを総括するものである。

2. 瀬戸集落の現状と星空観光の可能性

昨年度の報告において、瀬戸集落の現状には触れているが、本稿が総括を目的としているかぎり、星空観光の舞台となる地域の特徴については、再度、触れる必要があるだろう。

南越前町の東部、岐阜県との県境に位置する瀬戸集落は、総面積 4,800 万 m^2 の大部分が山林で囲われ（fig.1）、かつて林業と農業を生業とした 20 程度の世帯により形成されていた。現在では高齢化が極度にすすみ、林業・農業ともに衰退を見せ、加えて空き家も目立つ状態になっている。過疎化した集落として何ら特徴のない風景であると思われたが、詳しく調べると、明治期に建造された 12 基の砂防堰堤が形を変えず残存しており（fig.5）、土木遺産として専門家の注目を集める一面をもった集落であることが分かった。人工物と自然とが時間をかけて調和した風景は、昨今の観光ニーズから考えると、観光資源として加工することで市場化することが可能であり、市場原理からして瀬戸集落は十分に観光地になり得る可能性を有すると見なされた。

一方、瀬戸集落での星空観光の可能性については、観望場所への移動距離と星の美しさのバランスによって成立の可否が決まる星空観光の特徴からすると、集落の立地が移動の起点となる今庄 IC と JR 今庄駅から直線距離で 10Km 未満であり、移動距離としては適地であると判断することができる（fig.2）。また、星が美しく見える条件の一つに「夜空の暗さ」が関係するという見地からすると、瀬戸集落は山脈の谷間に形成する集落であるため、



Fig.1 Seto village of panoramic view (GSI Web)

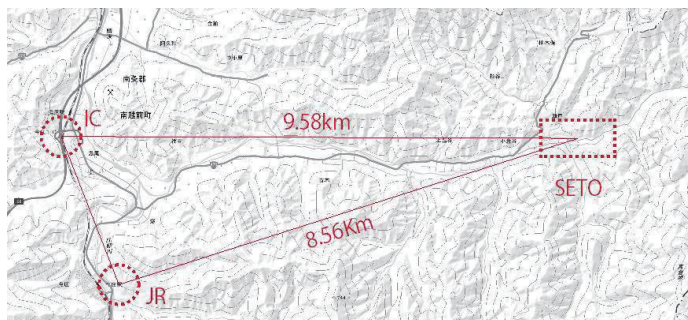


Fig.2 Straight line distance from traffic node (GSI Web)

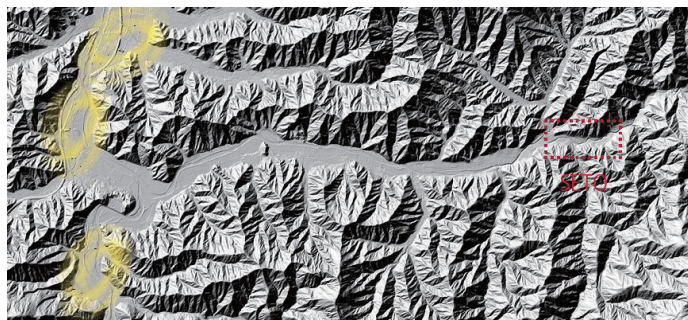


Fig.3 Impact of light pollution (GSI Web)



Fig.4 Winter landscape in Seto village (Author's)



Fig.5 Sabo dam in Seto village (Author's)

市街地の人工光（fig.3 の黄色いエリア）の影響を受けにくく、理論的には美しい星空を観望することが可能となる。

3. 瀬戸集落の観光形式に関する検証

瀬戸集落には明治期に建造された 12 基の砂防堰堤という特徴的な資源がある。砂防堰堤は谷間に流れる自然河川の土石流を防ぐために設けられた施設で、瀬戸集落の地理形成上、堰堤は山奥に存在しており、観光客が気軽に楽しめる場所ではない。ただし、例えば麓から 600m の殿入口堰堤、さらに 600m 奥の西高倉堰堤と谷中堰堤は、ガイド付きツアーによって観光資源に転化することは可能であると判断されたため、2017 年度から 2018 年度にかけて、ツアー形式を検証する目的で、福井工業大学の学生を対象としたテストツアーを実施した。

3.1 2017 年度のテストツアー

3.1.1 実施概要

- ・実施日：2017 年 12 月 3 日（日）9 時 30 分～14 時 00 分
- ・実施エリア：福井県南越前町南条郡瀬戸
- ・参加者：福井工業大学工学部建築土木工学科下川勇研究室ゼミ生 16 名、一般 4 名
- ・実施スケジュール：瀬戸区生活改善センター集合、テストツアーのルール解説 9 時 30 分
テストツアー開始 10 時 30 分
テストツアー検証 13 時 00 分

3.1.2 実施内容

本テストツアーでは、ツアー形式の検討材料を取得することを目的として、指定した集落エリア内における学生の着目箇所を確認した。学生たちは特に集落の自然風景（里山の風景）に着目し、遠景と近景を捉えていた。開始当初はツアーとしてガイドを立てていたが、学生たちの多岐にわたる興味をコントロールすることが難しくなり、途中からはエリア内を自由に行動するという方法に変更した。この行動現象は、実際の観光時においても想定されるため、事前に確認できたことは有意義であった。また、砂防堰堤については途中からの悪天候のため安全面を考慮して急遽中止とした。

テストツアーの終了後は、検証作業として、集落内で学生たちによる発表会を実施した。特徴的であったのは、集落の全景を撮影した学生は少なく、ミニマムに視点を定め、様々な表情を見せる足元の野草や清流などを中心に撮影していたことである。また、一部の学生は風化した石垣や建物にも関心を示し、そこから集落の時間的経過を捉えようとしていた。

3.1.3 実施結果

ツアー形式の検討材料を得ることを目的とした本テストツアーを通して、次の点を確認することができた。

- ・瀬戸集落は人々を惹きつける風景を持っている
- ・目的を持たず時間を過ごすことは難しいため、風景写真を撮るなど目的を明確にしたツアー形成がよい
- ・悪天候時のツアー形成として砂防堰堤をルートに入れることは難しい
- ・ルートを集団で移動するのではなく、自由に散策してもらう形式が向いている

3.2 2018 年度のテストツアー

前年度のテストツアーによりツアー形式の方向性がぼんやりとだが見えてきた訳であるが、2017 年 12 月に、集落の「青い雪」を確認することができたので、「瀬戸ブルー」というシンボリック標語に基づく観光形式の創出を目指す計画案を作成していた。そのため、2018 年度のテストツアーは、冬以外の季節において「瀬戸ブルー」という概念の適用可能性を検証することを主目的とした。

3.2.1 実施概要

- ・実施日：2018 年 6 月 23 日（土）9 時 30 分～12 時 00 分
- ・実施エリア：福井県南条郡南越前町瀬戸
- ・参加者：福井工業大学工学部建築土木工学科下川勇研究室ゼミ生 6 名、建築土木工学科開講科目「地域計画」受講生 8 名、一般 4 名
- ・実施スケジュール：瀬戸区生活改善センター集合、テストツアーのルール解説 9 時 30 分

テストツアー開始 10時00分

テストツアー検証 後日、大学において発表会を開催

3.2.2 実施内容

本テストツアーでは「瀬戸ブルー」という言葉のイメージを連想する集落風景を撮影することを目指した。参加者には事前に「瀬戸ブルー」の概念が集落で稀に見える青い雪に由来していること、冬場の観光だけではなく、その他の季節でも観光が成立する条件として、この概念の適用可能性を確認するという開催主旨を知らせた。

本テストツアーは、前年度の実施結果より、集落の風景写真を撮ることを前提として、定められたエリア内を自由に散策した。後日、大学において撮影した写真の中から各自が10点を選び、撮影した風景を象徴するタイトル、その風景と「瀬戸ブルー」の関連を示すようパワーポイントの書式を統一した。発表会時に提示された写真には、杉の木が生い茂った風景を「引き込む青」とタイトル化し、引き込まれる深い青と表現したり、清流の一部を「藍」とタイトル化し、命を繋ぐ深い藍と表現するような、感性豊かな「あお」を見つけてくれた。

3.2.3 実施結果

学生たちが撮影した風景は類似のものが多く、集落内に「瀬戸ブルー」を連想する風景の少なさが示されることになったが、一方で「瀬戸ブルー」のイメージから様々な「あお」が豊かに表現されたことは、ツアー成立の可能性を開くものであった。合わせて、瀬戸の風景は十分に「あお」と呼べるとの学生たちの直接の感想を受けて、「瀬戸ブルー」を瀬戸の集落観光の基本とすることが決定した。



Fig.6 Photo Walk of landscape by students (2017)

引き込む青

ずっとこの写真を撮っているとブラック
カーフに引き込まれるような感覚に陥
る。深くを覗いていると深い青に三層はし
める。
これこそがまさに瀬戸のブルーカラーだ。



瀬戸のマドンナブルー

瀬戸集落の山に咲く青いあじさい。
あまりにも綺麗に咲いていたので撮っ
てしまった。
この秋の青に引き込まれ3分。満腹した。
この青いあじさいは、瀬戸に咲く花。ま
た空をマドンナとして映していること
だろう。



藍。

深い藍。なんとも深い藍。
命を繋げるこの藍は、瀬戸集落の人たち
にとってとんでもない財産だろう。
たかが川の青。されど川の青。
瀬戸の人たちがとても大切にされている
のがこの川が象に表れていた。



静かに魅せる青

この時、わずかにあった時間が止ま
り旅人たちの心が静かになった。
森の静かな青。そして川の静かな青。
この二つの青が混ざり合った時、全てが
静かになった。
「私は今、感じているんだ
瀬戸ブルーを。」

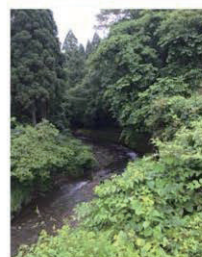


Fig.7 Examples of the results of the theme “Seto Blue” Photo Walk (2018)

4. 観光客を持て成す郷土料理の再生と継承

集落観光の成立に不可欠な「食」について、事前調査の結果、集落で昔から創作されていた郷土料理は、調理することができる住民の存在は確認できたが、食と電化製品の近代化によって消滅していることが分かった。このことから郷土料理の再生に取り組むとともに、それを次世代に継承する取組みも合わせて企画し、2018年度の中心的な事業とした。

4.1 郷土料理の再生に向けた調理実習

瀬戸集落の食文化の特徴は中山間の空間特性による。山の幸からなるナメシ、ワラビメシ、ムカゴメシ、ホオバメシ等の炊き込み飯、ウチマメ汁、キリグケ（大根の漬物）は昔から日常的に食されていた。コンブマキ、フキノニモノ、チマキ、ボロモチ、ヨモギダンゴ、トチモチ、ニシンの麴づけ（ニシンスシ）などもあり、これらは越冬の非常食であった。集落観光に向けた食としては、これら郷土料理の再生を試みた。また、古くから「ヌカ釜」を使用してコメを炊いていた特徴的な調理文化もあり、これも再生の可能性を探った。

4.1.1 実施概要

- ・実施日：2018年7月8日（日）9時00分～12時30分
- ・実施場所：福井県南条郡南越前町瀬戸 生活改善センター調理室
- ・参加者：講師1名（地元住民）、受講者5名（地元住民2名、一般3名）、記録3名
- ・実施スケジュール：
瀬戸区生活改善センター集合 9時30分
調理 10時30分
試食 11時20分

4.1.2 実施内容

本取組みは、ブランディング事業観光文化研究軸が委託している一般社団法人環境文化研究所が事前の段取り及び当日の運営を担当した。講師の地元住民の指導の下、ニシンのコンブマキ、フキノニモノ、スコ、ムカゴメシを調理し、受講者は習った。ニシンのコンブマキでは湯がいた大きな生昆布の上に菜箸一組を置き、そこにつけ戻しされたニシンを乗せ、菜箸を軸として昆布を巻き付けていく工夫など、受講者は指導者の習慣に触れることで特徴的な経験を得た。また、フキノニモノでは集落に自生するフキを採取するために受講者とともに移動するといった生活文化の体験も盛り込まれた。さらに講師の発案で予定になかったミョウガのお浸しを調理するために自生するミョウガを採取するなど、中山間集落ならではの体験も重ねた。

4.1.3 実施結果

食は集落観光にとって重要なツールであり、その出来次第ではリピーターの獲得の可能性が高まる。本取組みにおいて確認できた点として、場所の特性として保存食が中心となる郷土料理においては複数料理を並べることで十分に満足できる内容になること、また食事の雰囲気形成するテーブルや設置場所等の設えを工夫することで、食事を満喫できること、そして何より、食材を自生場所に採取しに行くアクティビティが観光客の心を捉える要素であることを確認することができたことは有意義であった。

なお、同様の調理実習は2018年10月13日にも開催され、秋の郷土料理の再生を試みた。その際、コメは伝統調理法である「ヌカ釜」を使用して炊いた。

4.2 次世代に継承する仕組みづくりと観光への反映

郷土料理と伝統調理法は食や電化製品の近代化にともない衰退した。そのため、再生の手続きとして、次世代に継承する仕組みも検討する必要がある。先述の2回の取組みでは講師の娘と孫に継承するという工夫を施した。現状では、集落に観光客が自由に出入りする形式では郷土料理を振舞うことは不可能である。そのため観光形式としてツアー時期を限定するといった工夫が必要となる。また、郷土料理の継承先を増やす必要もある。地元住民に拘らず関心のある一般の人々にも門戸を開く必要もあると考えられる。中山間集落という地理的空間としても心理的慣習としても閉鎖的である環境において「継承」という概念の捉え方を再検討すべきと考えている。



Fig.8 Cooking training aimed at regeneration of the local cuisine (2018)

5. 星空観光に向けたテストツアーによる検証

先行する小原集落の星空観光の取組みにより、雨天時の対応のために、集落観光の仕組みを構築しておくこと、そして、その仕組みに星空観光を加える必要があることが明らかになっていた。そのため、瀬戸集落では、第一に集落観光の確立に向けて取組んだ（2017-2018）。集落観光の形式が固まった 2019 年度は、この観光形式との統合を可能にする星空観光の形式を見出すことを目的として、星空観望のテストツアーを実施した。

5.1 実施概要

- ・実施日：2019 年 9 月 6 日（金）18 時～24 時
- ・天候：晴
- ・月齢：6.7（上弦・宵月）
- ・実施エリア：福井県南条郡南越前町瀬戸
- ・緯度・経度：35 47 55, 136 18 3（Leaflet）
- ・参加者：福井工業大学工学部建築土木工学科 下川勇，瀬戸区長，一般参加者 3 名
※一般参加者は本事業に協力する有志が営む宿泊施設に宿泊の一般客
- ・会場設備：一人用テント，ハンモック，キャンプチェアー 各 2 組

「2. 瀬戸集落の現状と星空観光の可能性」で示したように、瀬戸集落は山塊に囲まれた深い谷間であり、上空の視界は狭いものの、街の光の影響を受けにくいいため、美しい星を望むことができる場所である。静寂を特徴とする集落の夜に相応しい星空観光の形式として、「一人の時間を楽しめる星空観望」をコンセプトとした。地元住民が手作りで建設した調理小屋を備えた 100 平米程の空き地に、一人用テント，ハンモック，キャンプチェアーを 2 組設置して、2 名の星空観賞者，3 名のツアー客を招いたテストツアーを実施した。

5.2 実施結果

地理条件の利点である光害の影響を受けにくい場所に、山間集落ならではの星空観望の空間形成を施し、少人数のテストツアーを実施した。参加者のうち一般参加は、星空観望とキャンプ形式の空間形成との相性の良さを評価し、予定の時間を延長して滞在した。

その場で、ツアーを実践する際の受入れ対象について議論し、この度の空間形成であれば、本格的に星空を撮影したい人、少人数でキャンプを行いたい人、近隣の宿泊施設に滞在する夜の時間を楽しみたい人、この 3 通りの対象が相応しいとの結論にいたった。また、実施期間については特に設けず、予約があれば場を提供する形式にすることや、実施主体を地元住民とする案などが出された。



Fig.9 Space formation for starlit sky viewing (2019)



Fig.10 Viewing the starry sky (2019)



Fig.11 Starry sky on the day, PENTAX K-1 Mark II/ HD PENTAX-DA 16-85mmF3.5-5.6ED DC WR/
Manual exposure (F3.5・20s) / ISO 1600

6. まとめ

星空観光の成立に向けた瀬戸集落での取組みは、集落観光の形式を確定し、その形式に星空観光を付帯するという順で行った。2017年度に実施した集落の資源調査により、集落の風景や砂防堰堤が集落観光の核となることを見出すとともに、伝統食の再生と継承の必要性を確認した。2018年度には、集落観光の方法を実践的に検証する目的で、テストツアーを数回実施し、その方法を確定した。この間、地元住民と有志個人の集合による組織を編成し、集落観光の牽引力とした。当初の予定通り、2019年度は星空観光の形式を検討する目的で、テストツアーを実施した。本来であれば、回数を重ねて検証の材料としたいところではあったが、星空観望に適した時期に

台風が頻発し、一度のテストから解答を与えなければならなくなった。しかしながら、一般参加者の感想は、今後も、山間集落の特徴を活かしたいいわゆる「星空観賞キャンプ」という新しい形式の星空観光の確立に向けて、大いなるヒントになった。

謝 辞

本事業は文部科学省私立大学研究ブランディング事業として実施されている。本事業を深くご理解下さりご支援を頂いている瀬戸区の伊藤利憲区長ならびに区民の皆様、郷土料理再生の取組みにご賛同いただき講師役をお引受け頂いている伊藤百合子様、研究協力として一般社団法人環境文化研究所の田中謙次所長ならびに所員の皆様、ゲストハウス玉村屋オーナー中谷翔様、活動の維持を支援して頂いている南越前町観光まちづくり課の職員の皆様に、心より感謝の意を表します。

付 録

事業の推移（2017-2019 年度）

2017 年度

- (1) 事業名称：瀬戸区地元説明会及び懇談会
開催日時：8 月 10 日（木）15：00～20：00
開催場所：南越前町瀬戸区生活改善センター
- (2) 事業名称：集落風景から観光資源を探すフォトウォーク
開催日時：12 月 3 日（日）9：30～14：00
開催場所：南越前町瀬戸区

2018 年度

- (1) 事業名称：集落風景から観光資源を探すフォトウォーク
開催日時：6 月 23 日（土）9：30～12：00
開催場所：南越前町瀬戸区
- (2) 事業名称：集落風景から観光資源を探すフォトウォーク成果発表会
開催日時：7 月 13 日（金）13：00～14：30
開催場所：福井工業大学
- (3) 事業名称：生活文化が生み出した郷土料理の再生と継承
開催日時：7 月 8 日（日）9：00～12：30
開催場所：南越前町瀬戸区生活改善センター
- (4) 事業名称：生活文化が生み出した郷土料理の再生と継承
開催日時：10 月 13 日（土）9：00～12：30
開催場所：南越前町瀬戸区生活改善センター
- (5) 事業名称：瀬戸区地元説明会
開催日時：2 月 24 日（日）19：00～20：00
開催場所：南越前町瀬戸区生活改善センター

2019 年度

- (1) 事業名称：瀬戸ブルー～春の青～テストツアー
開催日時：2019 年 4 月 28 日（日）9：00～16：30
事業内容：フォトウォークと郷土料理
開催場所：南越前町瀬戸区集落内
- (2) 事業名称：瀬戸ブルー～夏の青～テストツアー
開催日時：2019 年 9 月 6 日（金）18：00～24：00
事業内容：星空観望
- (3) 事業名称：瀬戸スタジオ
開催日時：2019 年 10 月 27 日（日）13：30～17：00
事業内容：集落観光形式の確立に向けたワークショップ
開催場所：南越前町瀬戸区生活改善センター

（2020 年 9 月 10 日受理）